

8

大英帝国の支配から脱け出し、

今こそ真の民族自立を――

シドニーに向かったジェレミーは、

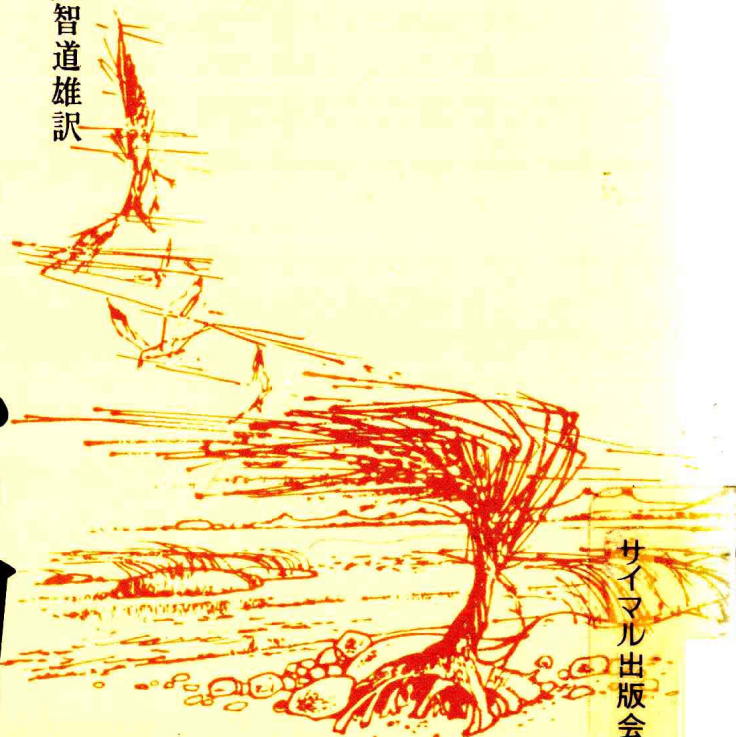
大司教、新首相、国粋主義者たちと

白熱の論戦を繰りひろげる。

ザヴィア・ハーバート

越智道雄訳

かわいそうな私の国



サイマル出版会

かわいそうな私の国

8

ザヴィア・ハーバート

越智道雄訳



サイマル出版会

サイマル出版会のめざすもの

*サイマル出版会は、激動する現代史の創造に読者とともに参加する姿勢で、国際的言論活動を展開するべく出発した。

*思えば、人類は平和のために戦争を続け、世界は一つであることを願いながら分裂し続けてきた。科学の発展は、電子情報時代をもたらしたが、情報の同時性はまた単純同一反応性をも生み、新たな誤解に苦悩する結果となっている。

*われわれは、こうした新たな誤解による相剋の根をとり除くために、また世界の指導国家として再登場した日本の国際的資質を豊かにし、国内の諸課題を鋭角的にとらえ、国際間の理解を深めるための現実的歴史的素材を提供しようと志すものである。そして地球上のコミュニケーションを円滑にすることによって、人間の条件を回復し、世界が平和の一つに運営統合される事業に、言論活動によって寄与しようと念願するものである。

*このささやかながらも高き理想に精進せんとするわれわれに、幸いにして読者諸賢のご支援を期待してやまない。

(訳者紹介)

越智 道雄
オチミチ

明治大学教授。作家。1936年愛媛県生まれ。広島大学大学院を卒業。豪州のノーベル賞作家パトリック・ホワイトの作品を訳出するなど、新しい文学分野「コモンウェルス文学」の紹介者として、また第42回シドニー国際ペン大会には日本代表として精力的に活躍するほか、新進の小説家として創作活動にも励んでいる。豪日交流基金とオーストラリア・カウンスル文学局の奨学金を受け、78年4月から一年間、シドニー大学に研究員として訪豪。訳書にP・ホワイト『ヴォス』(サイマル出版会)、A・プリング『アフリカの悲劇』、J・ミーカー『喜劇としての人間』、H・プリングズミード『青さざ牧場』など多数があり、作品集に『遺贈された生活』がある。
現住所・〒228 神奈川県相模原市相模台2-20-3

Japanese translation rights arranged with
William Collins Publishers Pty Ltd, Sydney.

日本の読者へ——ザヴィア・ハーバート

オーストラリア文学の記念碑——訳者まえがき

第1部 テラ・オーストラリス

おだやかな原住民の生活を打ち壊す

白人暴徒、泥棒、偽善者たち。

(1・2・3・4巻)

第2部 オーストラリア・フェリックス

白人の理想も、同じ白人の悪漢、愚

者に裏切られて。

(5・6・7・8巻)

第3部 屈辱の日

民族自立のための試練から逃げだす

烏合の衆。

(9・10・11巻)

* 主要登場人物 *

ブリンディ マーティン・ディレーシー
とアポリジナル女性のあいだに生
まれた四分の一混血児。本書の主
人公。

ディレーシー、ジェレミー

マーティンと克蘭シーの父。リ
リー・ラグーンズで鉱山及び牧場
を経営。本書の副主人公。

エスク將軍、マーク卿

大英帝国によって任命されたオ
ーストラリア軍最高司令官。

「大嵐ボブ」

ボブウィリディリディ参照。

オカダ船長 日本人の真珠貝採取業者。

カピティ博士、カスバート

アポリジニ保護官。

カフン、ディニー 巡査部長。

カリティ、ブライディ コン・カリティ
の妻。フィヌーケインの長女。

キャンドルマス、イールフリター(アル
フィ) アポリジナルの待遇改善にとり組
む女流作家。

クーツ、フェビアン 文化人類学者。

グラスコック神父 レオポルド群島のカ
トリック伝道師。

「チーフ」 自由オーストラリア運動
創立者。

ディレーシー、克蘭シー

ジェレミーの次男。キャットフィ
ッシュ牧場支配人。

ディレーシー、マーティン ジェレミー

の長男。ベアトリス・リヴァ牧場
支配人。ブリンディの父。

デーヴィッド プロテスタント伝道所の

トラック運転手。アポリジナルと
日本人とのあいだに生まれた混血
児。

ナナゴー ジェレミー・ディレーシーの

二度目の妻。ハーフカースト。

ハナフォード、バット

列車機関士。共産党のデマゴーク。

バーブー、ラム(アリ・バーバ)

インド人行商人。

ビカリング判事「北豪」最高裁判事。

フィヌーケイン、シェーマス(シェーム

「オン」アスヒ)

ベアトリス・リヴァ・ホテル経営

者。アイルランド人。

フェリス、ファーガス

文化人類学者。パイロット。

ブルー、ビリー 驢馬馬者の御者。

ホッフ博士、クルト ユダヤ人亡命者。

ボブウィリディリディ(「大嵐ボブ」、
賢者)「虹蛇」信仰のアポリジナル魔

術師。

マカスキー、エディ アポリジニ局役人。

マクフィー、フェイ パームストン・プ

ログレシブ紙記者。

マリジック猊下 カトリック伝道所高僧。

「やつこさん」 自由オーストラリア運

動の職員。

ローゼン、リフカー ユダヤ人亡命女性。

(アイウエオ順)

8

第2部

オーストラリア・フェリックス

18 章	リフカーの受難(続き).....	1
19 章	カフーン溺死.....	67
20 章	ジェレミー、シドニーへ.....	197

第2部 オーストラリア・フェリックス

18章——リフカーの受難（続き）

ヴェゼイ・ディレーシー家街屋敷の例の木立ち、そのマラヤ産チエツカの大木で、シロビタイオオギビタキが夜もすがらガリガリ「クレージ」な愛のことを歌い続けていた——他方、この甘美な狂気を惹起した元凶「イガルガル」は、その犠牲者たち二人が、たがいに恋の奴^{やつこ}となつてもがき苦しんでいる場合、さもないければたがいに胸焦がすばかりでいまだに結ばれ合っていないか、いずれの場合にも二人の姿を目にとめるたびにウインクを送りながら、空を渡っていった。

イガルガルはヴェゼイ・ディレーシー屋敷の白い屋根にもウインクを送っていたが、その正面玄関の石段に、例の龍の像に挟まれて、パジャマ姿で坐りこんだ克蘭

6

シーが、溜息をつきつき、恋の熱病に冒された自分の血を求めて群らがる蚊を、氣もそろにびしゃびしゃ叩きながら、銀色に輝くイガルガルの笑顔をひたと見あげていたが、月神はこれきいわいと、彼をますますガリガリに駆りたてていった。

その間二度立ちあがったが、そのたびに彼は、緊張にあえぎながら、忍び足であわただしくベランダのまわりをまわっては、目ざすドアにくるたびに燃え盛る情欲の焰をむりやり消しとめたけれど、戸口でぐずぐずしているあいだも、あまりにも心臓の鼓動が激しいので、屋敷中目をさまさないのがいつそふしぎなくらい。

しかし、室内から聞こえる低い寝息がいつこうに乱れないところを見ると、心臓の鼓動音も眠っている部屋の主ひとりにすらほとんどなんの影響も及ぼさないとみえる——その息遣いは、彼にとっては単なるリズムミカルな酸素吸入活動以上の意味を持つものらしく、しばしそれに聞き入ったあげく、まるでそれから柔らかな象牙色の肉のケーブを思い出して、たださえつぱった自分自身の肉体に地震でも起こったかのように、ガタガタ震えながら離れていったのである。

ついに彼は、彼女の部屋の戸口からほど遠からぬ底の深いデッキチェアに坐りこんだまま眠りこみ、恋の不可思議さと悩みに充ちた寝苦しい夢に身を委ねた——一方、イガルガルは、いまや地平線の向こうに開いた例の穴へはいつて自分と落ち合おうと、低く唸りながら流れていく「魔物」の水の霊に向かってウィンクを送りつつ、にたにた笑いながら空をよぎっていき——キリキジリット「シロビタイオオギビタキ」は、歌って歌って歌いぬいた……キリ、キリ、キリウィリリジティット……甘美で美しいおもちゃ、つまり愛の歌を！

彼はヘリオトロープ色の夜明けに目ざめ、隙間なく蚊に噛まれた跡をボリボリひっかいて、さっと立ちあがると、スクリーンの降りたドアへ歩み寄った。室内から柔らかない声呼びかけた。「おやよう！」

彼は息弾ませてとびこむと、挨拶しようとして上半身を起こした相手にいまにも掴みかからんばかりだったが、しかし実際には柔らかい両の肩に手を置いて、青白くかすんで見える彼女の顔をのぞきこみ、ベッドのぬくもりの中からたち昇る女の芳香を深々と吸いこんだ。彼は、あえぎながらいった。「きみが……きみが逃げ出したよう

な気がして……つまりそんな夢を見たってことだけど」

彼女は、おそらく彼をある程度離しておこうとするためだろう、彼の腕に両手をかけた。なにしろ声からして、彼のように興奮してはいず、むしろ乾いた用心深さがあるだけだったのだ。「どこへ逃げ出すっていうのよ？」

「わからない。でも、ほんとに、そんなことしないよね……え？」

「そうしてほちいの？」

「どういう意味だい？」

「夢に見る、ゆのはそうのじょんでいるからよ……フロイトは、しょういてるわ」

「フロイトなんて、くそくらえだ！　なんで、このぼくが、きみに逃げ出してほしがったりするってんだ……これまでだって、囲いこむのに大骨折ったってのにさ？」

「囲いこむ？」

「がきつない方して悪かったよ。でも実際は、ほめ言葉のつもりでいったんだけどね。十四のころだったか、栗毛の雌の子馬をもらったんだが。きみを見ると、その子馬を思い出しちゃって」

彼女はくつくつ笑った。「馬を！」

「そいつはすごい美人でねえ……ぼくは、そいつにまる
で……人間の女の子みたいにほれちゃってたんだ。でも、
無作法な嘘えになったらごめんよ。ぼくはただ……きみ
を愛してゐるってことがいいたくて！」

「あなたって、いい人ね!」。彼女は低い声でいったが、相手が迫ろうとすると押し離れた。「みゃって」「待って」「みゃって! わたし、まず起きにゃいと。しゅごくお茶が飲みたいのよ」

「いいとも……いいとも！」。彼は叫ぶと、刺すようにキスして、パツと駆け出していった。

彼がひき返してくると、彼女はパジャマの上にキモノを羽織つてベランダへ出、そのデッキチエアに坐つてゐた。またもや彼は、彼女には縁がほんとはよく似合うといひ、きょう買いにいひく彼女の服の話をした。彼女は断りたかつたのだが、彼は聞かなかつた。

「たとえきみにボールやなにやらウエディングドレスを着せて祭壇へ連れていけなくても、あの古い教会で、これまで見たこともないような姿でいてほしいんだよ。マジック爺さんは、相手がご婦人となると、ちよいとばかり若返っちゃう口だし……少なくとも、むかしはそう

「だってことだからさ」

しかしほとんどの場合、彼はきのうまでの興奮しきつた恋の奴ではなく、むしろ神経質な花婿といったところで、話しているあいだもなかなか慎重だった。ペランダで盆にのせて朝食をとるあいだは、なおさらそんな風だった。

彼は、留守中、自分が街に出てきたことを聞きつけて友だちが訪ねてこないともかぎらないから、彼女はずつと部屋を出ないようにと忠告した。そういう客がくればハンノが適当にあしらってくれるから、ということだった。

やつと街へいく支度ができると、彼はまたやつてきて彼女に軽くキスし、出がけにいきさかやけつぱちに聞こえるいい方で、「指をクロスさせといってくれたまえよ！」と、いった。

予測どおり、法廷書記官ディッキー・ドスカスは事務所に詰めていた。それも土曜日なので、一人で。彼はたいへん親しげに克蘭シーに挨拶し、いささか陰のある口調で「あんたの親父さん」は元気かと訊いた。しかし、克蘭シーが特別結婚許可書のことを切り出すと、率直

に驚く、というよりほとんど愕然となった。「こりゃどういうこったね？ 駆け落ちかなにかか？」

ありありと当惑した顔つきになって、彼はिकास娘に出遇つて——そのう、すったもんだぬきで、そつと結婚したいんだ、と答えた。

「おかあさんぬきでかい？」。意固地そうな目が相手をいぶかしげにすかし見た。

克蘭シーが唾を呑みこみ、青ざめて、目をそらすと、ドスカスがきつい声で訊いた。「相手は色つきか？」

克蘭シーはさつと相手に目を向けた。「まさか！」

それでも相手の目からはうさんくさそうな表情が消えない。「私の知ってるひとかい？」

またもや克蘭シーは、ごくりと唾を呑みこんだ。

「名前はなんていうんだ？」

克蘭シーは大きく息をついてから答えた。「リファ

ー・ローゼン」

相手のほかでかい図体が超特大の回転椅子の上でぐたりとなつて、ぜいぜいと溜息をついた。「なるほど……あのユダヤ難民の娘か」。克蘭シーはまた色をなくした。「妖精ばあさん」のフェイが書いてた娘だろ、

え？」

克蘭シーは、喉をしめつけられたような声で肯定の返事をした。ディッキー・ドスカスは、うつむいて目を合わせられないでいる相手を、ふつうよりは長いこと見守ってから、やおら深々と息を吸いこんだので、またしてもひきがえるみたいな図体に脹れあがつてしまったが、そのまま椅子をまわして、散らかったばかりでかい机に向き直ると、見るからに雑然とした引き出し、積み重ねた原簿、役所の用紙、紐で結んだ書類などのあいだへ、太った小さな手をのばした。「まあ……まともな話だとい

いけどな、お若いの」

目下の状況からするとびっくりするような気軽さで、彼は必要な品々、つまり用紙、原簿、受領証などをひっぱり出した。「きょうから三日後に結婚できるよ……手数料五ポンドだな。サインするかい？」

ついついもたもたして、内心の動揺を露呈しながら克蘭シーがサインしていると、ドスカスがいった。「すごいべっぴんだと聞いているけどな」

克蘭シーはあえぎながら答えた。「うん」

「結構なこった……厄介なことになりさえしなきゃあ

な」

克蘭シーは、サッと、しかしこわごわ相手の意固地
 そうな目をうかがった。ディッキー・ドスカスがたり
 と笑った。「つまりあんたのおかあさんにとってこそ、
 親父さんとは大丈夫かい？」

克蘭シーはあえぎながら答えた。「ああ、そりゃも
 う！」

ドスカスは、そっけなくくりと笑った。「まあ、雌
 馬のめきぎにかけちゃ、親父さん心得てるもんな。彼女
 はいまどこにいるんだい？ 汽車に乗ってくるって話は
 聞いてないけどな」

克蘭シーが、すばやく答えた。「まだベアトリスに
 いるよ」

「あっちで式をあげるつもりだね、え？ だれかとりし
 きってくれるんだろ。さーとと……あっちにゃJ.P.〔治
 安判事〕が二人いるよな……スタンク巡査とフィヌーケ
 インだ……いや、三人か。あんたの兄さんのマーティン
 がいるじゃないか。しかしあんたとしちやお呼びじゃな
 いよな、え？……アワーアワー！」

克蘭シーは目をしばたいた。「たぶんシェーム」

オンシアスの爺さんになるだろうね」

「じゃあ、相当大じけなバーティになるな。いつか彼
 女をここへ連れてきて披露してくれよな」。太った手が
 さし出された。「じゃあ、お若いの……万事うまくいく
 ようにな。いずれにしてもフェイの記事のとおりなら、
 あんたはかなりいい相手をものにしかけてるわけだ。わ
 れわれの娘どもはブッシュで暮すとなると、大して役に
 立たん。フェイが書いてるように、ユダヤ娘がブッシュ
 を好きになるってのは珍しいよな」

克蘭シーが今度は熱意を示して、いった。「ユダヤ
 人たちが、そもそもは牧羊業者としてスタートしたって
 ことを忘れないでほしいな……ほら、アブラハムやヤコ
 ブや、その他いろいろバイブルに出てくるじゃない。羊や
 牛の群れを率いていた連中さ。東ヨーロッパのユダヤ人
 にも、農場やつてる者がたんといるし……それにユダヤ
 人がパレスチナ砂漠でやってのけたことを見てごらん
 よ」

「確かに、あんたのいうとおりだね」

克蘭シーが同じ調子で喋り続けているあいだ、意固
 地そうな目がいぶかしげに彼をすかし見ていた。「ベア

トリスには何人か専門家がきて、例の入植計画のためにいろんなことを見てまわってたしね……全員、農場科学者たちだよ……家畜や土地の知識をおたがいに交換し合えるしよ」

「ふむ！ その入植の一件は、ひょっとしてこの界限にとつては、棚からボタモチでことになるかもしれないな。ムーン・フェースに微笑が、さざなみのようにゆらいだ。「とにかく……いいこったよ、そういう一族と姻戚になるってのはな……イーイーイーシュ！」

克蘭シーは、出がけにふり向いて、低い声でいった。「よかったら、この話伏せといしてほしいんだけどね……あの連中に知られたかないんだ。あんたもどんな手合いか分かってるよね……」

「内緒にしとくよ、お若いの……内緒にね！」

カトリック教会のほうへまわると、克蘭シーは黒人の庭師に、バンガロー風の古い伝道所にあるマリジック猯下の住居へ案内された。手入れのいき届いた庭を通るとき、崖の向こうに海がチラと見てとれた。伝道所のスクリーナー、聖フランシスコ・ザヴィエル号が、ひき潮の中でピンと錨綱をはって碇泊していた。

遠く西のほうに老チャマラの背骨が見はらせたが、屢気楼の中で、それはひいていく潮が躍りはねるにつれて、大きく上下しているようにみえる。自分の伝道所からやってきたグラスコック神父が、きょうは白い長上着^{カッパ}をつけ、片手に時課典礼書を抱えた姿で、バンガローのベランダを歩いていった。克蘭シーが片手をあげてちよつと挨拶すると、相手は典礼書を動かして会釈を返してよこした。

克蘭シーが書斎にはいると、猯下は底の深い防水布製の寝椅子に横たわって本を読んでいたが、黒のカソックのボタンを外して毛深い太った胸とせり出した太鼓腹をむき出して、ちらかった机の上でブンブン唸っている小さな扇風機の風を受けているところだった。老人は、戸口に立つ人影のほうに目を向けた。

克蘭シーは、三尺退った位置でかしまって両手を前にそろえ、小腰をかがめて立っていたが、この首席司祭がそのスラブ鼻からめがねを外して、露骨にうろんな目つきになってすかし見た様子では、せっかく表わした敬意も、まるで通じなかったらしい。克蘭シーは咳払いした。「おはようございます、猯下」

老僧は、わずかに体を起こしたが、姿勢は変えなかった。「おひゃよう、お若いの……それで、やんのご用かな？」

克蘭シーは、うやうやしく戸口の脇柱に両の手をのばすと、唾を呑みこんだ。「ぼくの名はディレーシーといひます」

「きみの顔を見りゃ、いよれはわかる。洗礼を受けにきたに、よかね？」

克蘭シーは驚いた表情になった。「ああ、いえ……洗礼は赤ん坊のとき、狎下にしていただきました」

「そうじゃったね！ にゃらばきみは、自分のクリスチャン・ネームが恥ずかしくて、私にいえに、やいというわけかね？」

克蘭シーが、目をパチクリして面くらつてみると、老人が不機嫌にいった。「しかし、まあはいりたまえ。そこにかけて」。克蘭シーがおそるおそる机脇の椅子に腰をおろすと、僧は言葉が続けた。「クリスチャン・ネームを恥ずかしがる者はたくさんいるよ。いよれ、よくないことだがね。もつともがれらが悪いのじゃない、悪いのは両親や名づけ親たちだ。しかし、もちろん教会

には、いよれを直す手立てがあり、……われわれが堅信礼で選んだ名前だよ、つまり守護聖者の名前じゃ。きみの守護聖者はどなたかな？」

克蘭シーは小声でいった。「トマス・アキナスです」

「なるほど！ するときみは、はの『天使のごとき博士』の御跡を慕ってきたわけだ……きみは教師か学者かね？」

すっかり当惑して、克蘭シーがむにゃむにゃと答えた。「いいえ、狎下」

「じゃあ、私はきみに、どんな洗礼名をつけたのかね？」

「克蘭シーです」

老人はさらにも少うし身を起こした。「ふふ……だからきみは恥ずかしがつとるに、よか！ あのなあ……どうも、この国の人間には、ちぶんの子供に克蘭シーという名をつけ、やがる者が多いのじゃが、克蘭シーとはいったいに、やに者だったのだろうね？」。これは純然たる反語的質問で、なにしろそう訊いた本人が、すぐに言葉を続けたからである。

「克蘭シーは、バイブルの予言者にはいない、カレン

ダーの聖者にもいない。私があり、こり、調べてみたあけく分かったことといえば、『洪水牧場』の克蘭シーという伝説的なブッシュ住まいの人物〔豪州屈指のパラード作者、パンジョー・パスタン（一八六四—一九四二）作詞になる同名の歌の牛追い〕がいたことくらいじゃわい。どうしてなにも知らない子供だちにへんな名前押しつけなきゃならいのかね？

しかもとんとん悪化しているんだ、ごのへんでこな名前をつけることがね。いまじゃ、そういう名前を親に思いつかせる原因がカッドウ写真なのじゃよ。先ちゅう〔週〕も、女の赤子にグレタという名前をつけてくれと頼まれてね。その両親と名づけ親たちになぎいてみたよ、しよんな名のヒロインや聖女がバイブルに出てくるのかとね。どう返事したと思う？ なんとグレタ・ガルボの名前からとったというじゃないかね」

そのあいだも、青みがかった灰色の目がスラブ風のデジゲジ眉の下から、ひたとこちらを見据えているものだから、克蘭シーは自分の目を伏せざるをえなくなった。やつのことで、「し、やて克蘭シーくん……（用は？）」

克蘭シーは許可書を手探りしながら小声でいった。

「結婚したいのです、猥下」

「若者なら、まことに当然のごとじゃね。しかし、ごれはに、やんだね……特別結婚許可書じゃないか。あわてて世帯を持つと、六十年の不作というぞ。リフカー・ローゼンか。どうやらユダヤ人の名前らしいな。ごれはフェイ・マクフィーのペンで有名になった若い娘さんじゃね？」

克蘭シーは小声でいった。「はい、神父……猥下」
「わが有能なミス・マクフィーのおかげで有名になっても、きやならずしもいい目は見えないようだね」。克蘭シーは、げじげじ眉の下で光る目に睨まれて、また目を伏せてしまった。老人は、今度は少しきつとなつて訊いた。「に、やぜ私の所へ、ごの女との結婚を頼みにきたんだね？」

克蘭シーはごくりと唾を呑んだ。「兄のマーティンの式をあげて下さったし……それに父の式も」

「はの二人は、カトリック信者の娘と結婚したのだよ」
「でもカトリック信者は、祭壇の後ろでならカトリックでない者と結婚できるのではないですか？」

「ある条件の下ではできる……しかし、よれはしよのカ

トリックでない者がキリスト教徒である場合のことじや」。しばし緊張した沈黙。やがて、「このほんなはユダヤ教徒とほもうがどうかね？」

克蘭シーはうなずいて、あえぐように答えた。「はい」

今度は老人の肉づきのいい赤ら顔が暗く翳り、声が喉の奥から出てきた。「にやらば、よくもキリスト教徒であるきみがキリスト教の僧侶に、わが祝福された救い主を拒むもによ」「者」との婚姻に対して、カトリック教会の祝福をし、^えがみにきたものだ。彼は、寝椅子の足をのせる個所からスリッパをはいた足を降ろすと、どすんと床を踏み鳴らして、上半身を起こし、ぎらりと睨みつけた。

克蘭シーは赤くなって目を伏せると、またしても相手の前でもぞもぞと手を動かし。しばし沈黙が続いて、やっと彼は思い切つて顔をあげると、相手を見返した。

「どうなんだ？」。僧侶がきつい声で問いただした。

克蘭シーは唾を呑んだ。「じゃあ……じゃあだめなんですか？」

「だめなんてものじゃあない……ただもう思いもつかん

ことだ！」。老人は許可書を返してよこした。

克蘭シーは、深く息を入れてから、くると背を向けた。そのまま戸口までくると、首席司祭が声をかけた。「みちちたまえ！」

彼はふり向いた。老人が訊いた。「わしのところへ頼みにきたのは、なにか特別な理由があつてのごとかね？」

克蘭シーは目をしばたいて、うなずいた。

「それはにやにかね？」。克蘭シーが唾を呑んでうなだれると、僧はいい足した。「にやにか手が後ろへまわるようなことをやつておるな？」。克蘭シーはうつむき、すっかり惨めな思いで黙っていた。「この娘を彼女の同胞から盗んで逃げたんだね？」

克蘭シーは小声でいった。「彼女には家族はありません」

「全ユダヤ人が彼女の家族みたいなものさ」。またしばらく黙つていてから、猥下がいった。「ユダヤ人は、異教徒との結婚にはわり、^えわり、^えよりも厳しいことは知っているかね……つまり、祭壇の蔭でこそこそつじつまを合わせたりはしないんだ……結果は完璧な追放以外には